
TALES OF XILIA ~マクスウェルの騎士~

キリト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

T A L E S O F X I L I A ～マクスウェルの騎士～

【Nコード】

N 0 0 4 3 X

【作者名】

キリト

【あらすじ】

世界に現われた精霊の主『マクスウェル』そして彼女を守る為にと1人の精霊が召喚された…それから時は流れ2人は互いに世界に秘められた『真実』へと向き合っていく……これは、『揺るぎなき信念を信じる物語』

オリジナルの設定が多々織り込まれる予定なので本編とは途中で隔離してしまう可能性有り

序章 契約

此所は、何処だ…？

一際強く輝く小さな一つの光が様々な輝きを放つ光の世界を漂っていた

しかし、その漂っていた光の輝きは徐々に小さくなり明滅し始め消えてしまいそうになる

俺は、誰なんだ？……………！？

『俺が手を伸ばさないと消えていく命があるってんなら！俺は戦い続ける！…！』

『このままじゃ！貴方は×××の力に飲ま困れてしまう…！』

『……………それでも……………それでも、例えこの先に待っているのが××だとしても……………最初から諦めたくないんだよ、俺は』

なんだ今のは…俺の、記憶なのか？

小さな光は自身の頭に突如飛び込んできた映像と声に混乱する

しかし、それが自身の記憶だと判断する事が出来ないのは頭に浮かび上がった人物の顔が曇った様に見えずそれが誰なのかは分からなかったのだ

……例え見えていたとしても今の彼は記憶と共に自身の全ても忘れてしまっている為に分からなかっただろうが

『私は！私と彼女は貴方の事が！！』

『……分かっている…分かっているからこそ俺は戦うんだ』

『貴方は、馬鹿……です……でも、そんな貴方だからこそ私達は……』

2人の人影が荒野に立つ1人の青年を見つめながら叫ぶ中、青年の視線の先の地上には地平線を埋め尽くさんばかり大軍が空からは幻獣達が迫ってきていた

1度だけ背後に振り返った青年は2人の人影に微笑みを向けると直ぐに大軍に向かって駆け出して行くとそんな彼の側に1人の女性が舞い降りてきた

『本当に、いいのか？』

『この戦が始まった理由の一つは俺だ…なら俺は責任を取らなくちやいけねエ』

『ふふっ…損な精確だな我が主様は……だからこそ私は仕えているのだがな』

『悪いな…×××××』

その言葉に言葉ではなく微笑みで返した女性は主と呼んだ青年と共に大軍に向かって行く

『行くぜ！俺の…最…の変……だ……！！』

駆ける中で青年は取り出した道具を身に着け何かを叫ぶがその声に

は砂嵐の様な音が入ると同時に映像も消えていく中で最後に歌の様な響きが聞こえた

《TAxA!》《xxxxx!》《xAxxx!》

《TAXX - BAX!TXXXA!TA・TO・BA!》

何だったんだ、今は……あいつらは、俺は、一体何者なんだ……誰か、教えてくれ……

《待っていた…待っていたよ、長い時の中を…》

突如、先程の映像に現われていた女性が光の前に現われ大切に抱き締める様に手で覆う

お前は…誰だ？

《……やはり、覚えていないのだな》

光の弱々しい声に女性は表情を悲しそうに曇らせるが1度瞳を閉じると決心したかの様に光へ語りかける

《一方的で申し訳ないが私は貴方に失った記憶を思い出して貰わなければいけない》

……このままだと俺は消えるだけの様だしな…分かった、と言ってやりたいところだが…

《そう。今の貴方の力だけでは無理だろう……故に私と契約しよう、私は貴方に力を貸す代わりに貴方には記憶を取り戻す事ともう一つやって貰う事がある》

もう一つ、だと？

《そうだ…1人の少女を守って貰う》

そう言った次の瞬間に光の目の前には1人金色の髪をした少女の姿が映し出される

いいだろう、俺は記憶を取り戻し彼女を守ろう……契約する

《うむ…契約、完了だ》

女性のその一言を切っ掛けに光は人の輪郭を持ち始め女性はその光が人の形となると同時に光と共にその空間から姿を消した

時と場所は移り変わり此所は精霊と人間が共存する世界『リ
ーゼ・マクシア』に存在する村の一つ《ニ・アケリア》

この村は元素の精霊である『マクスウエル』を奉っており、今この
時その存在が現れようとしていた……のだが…

《ズガアアアアン!!!》

突如として起こった爆発によりその光景は一瞬にして瓦礫の様に倒壊してしまった

『な、なんだ!?!』

『一体何が起こったというのだ!?!』

『落ち着け!落ち着くのだ!!!』

『!マクスウエル様はどうなったのだ!?!』

ザワザワと集まっていた人々が騒ぎ声が最後の一言に反応し爆発が起こった場所に視線が集まると巻き起こった爆煙の中から1人の女性が咳き込みながら出て来た

「ゲホツ!ゴホツ!……な、なんだこれは……」

歩いて煙の中から出て来た金色の長髪を持つ女性が顔に付いた煤を

払っていると集まっていた人々の代表らしき人物が彼女の前に出て来た

「し、失礼ですが…貴方がマクスウエル様…ですか？」

「ん？ああ、そくだ私が精霊の主であるマクスウエルだ」

ザワザワ…ガヤガヤ

煤を払い終えた彼女、マクスウエルの言葉に集まっていた人々は歓喜の叫びを上げる中で彼女は彼等に一つの疑問を投げ掛けた

「すまないが、一ついいか？」

「は、はい！何でしょうか？マクスウエル様」

慌てて姿勢をただす村長に彼女は首を傾げながら背後の爆発で生じた煙を指差した

「この爆発はなんなのだ？」

「……え？」

「ま、マクスウェル様の御力ではないのですか!？」

「違う、私の力どころか私は関係すらしていないからな……戸惑っているのだが……」

そう言い彼女が煙を見つめるとその中から一つの人影が飛び出して来た

「ゲホッ！ゴホッガハッ!!」

出て来たはいいがその人影だった少年は爆発の中心に居たのか彼女よりも煤塗れな上にとても咳き込んでおり、彼女は少年を警戒し飛び出そうとしていた者達を手を伸ばしいさめると少年に近付き声を掛ける

「この爆発は君が原因か？」

「ケホツゴホツ…ああ、悪いな…ミラ……ゴホツ！」

「…!!…何故まだ誰にも話していない私の名前を君は知っている？」

少年がまだ誰にも告げていない自身の名前を口にした事により彼女は驚愕していた

「ああ悪い悪い……お前の方は知らないんだっとな……俺もミラと同じ精霊だよ、俺は君を守る為に精霊界から召喚された…らしい」

「らしい、とは……どういう事だ？」

「俺も話しを聞いたただだからな……あそこで四大精霊と話している彼女にな」

少年が指差した先には困惑しつつも静かに目の前の女性の話しを聞く四大精霊の姿があった

「ふむ、彼女も大精霊の様だな」

「そう、俺は彼女に君を守る騎士として君の側に召喚させられたんだが…ちょっと失敗したらしいな」

「なるほどな、確かに君達からは大精霊の力を感じる上に君にそれを話した存在は四大の反応を見れば嘘でもないらしい…いや、先ず私達精霊には」

「嘘をつく意味は無い、だろ？」

少年の言葉に彼女は笑いながらその通りだと答えるとその光景を見ていた皆は彼女達の話から少年も自身達が敬う存在だと理解したらしく少し同様している

「私はマクスウェル…ミラ・マクスウェルだ…これから宜しく頼む」

「ああ、俺の名は……」

少年は差し出された彼女の手を握り自身の名を告げた……

15年後

1人の青年が社のような場所の前で誰かを待つ様に瞳を閉じ近くにある木に背を預けており、肩に掛かる程度の長さで切り揃えられた金色の髪が風になびき青年が瞳を開けると同時に社から彼と同じ金色の髪と赤い瞳を持つ1人の女性が社からその姿を現わした

「……………行くのか？」

「ああ、破壊しなければいけないからな」

青年の言葉に女性は答えながら社から村へと続く階段を降り始め青年もその後が続いて行く

あの日、マクスウェルである彼女と共に現われた彼はあれからずっと彼女を守る様に過ごしてきた

その使命を支え何より彼女を守る為に彼女だけの精霊として何より騎士として共に旅をし生きてきた

その長きに渡り共に過ごしてきた2人は先程の短い会話だけで十分に意思疎通が出来ているらしく共に過ごした時間の中で培われた信頼関係を現わしている様でもある

そうして黙々と歩いて行く中で女性がふと思い出した様に青年に歩みを止めず振り返り問い掛ける

「そういえば、どうだ？少しでも記憶は戻ったのか？」

「いや、全くだ…あれから十年も経つが全然思い出せない」

「そうか…すまないな」

青年の返答を聞き彼女は申し訳なさそうに謝るが青年は笑って彼女に語りかける

「まだ気にしているのか…俺が記憶を無くしたのはお前のせいじゃないだろう」

「しかし…記憶が無いのは召喚以前からなのだろう？……だとすれば…」

「だから、その召喚自体もお前は何も知らなかったんだ…気にするなって」

申し訳なさそうにしていた女性の髪を乱暴に撫でると青年は行くぞ、とだけ言い歩みを少し早め女性はそうだなと微笑みながら青年を追う様に止まっていた足を再び動かし村へと歩き出した

マクスウェルを奉りし村『ニ・アケリア』

村へと到着した2人は長に暫く出掛けてくると伝えシルフの力でいざ行く、としたのだが……

「ミラ様………!!!トレイズ様………!!!」

突然聞こえてきた耳を劈く様な叫び声に2人は肩をガクツと落とし
叫び声の元凶である走ってくるなり自身達の前で跪いた少年を見て
額に手を当てた

「イバル………何の用だ？」

「はっ！先程御2人が村に来てトレイズ様が長と話していたと聞き、
これは何かあったと馳せ参上しました!!!」

「………お前のそういう行動の早さだけは凄いなと思うよ」

女性：『ミラマクスウエル』の問い掛けに跪いたまま答えたイバ
ルの答えに青年：『トレイズラタスク』は半ば呆れた様に語る
………しかし、それもそうである。

何故なら2人が村に来てからそう時間が経っていない上に先程トレ
イズが長に話しに行った時に聞いた話ではイバルは今居ないと聞
いていたのだから彼のこの行動力は本当に凄い物である

「トレイズ様と同じく私もミラ様を御守りする為なら例え何処に居ようが火の中水の中何処にでも！！直ぐに……」

「ああ、分かった分かった……そこから先は分かっているから言わないでいい」

「イバル……心配せずとも直ぐに帰ってくる……その間、村を頼んだぞ？」

「そうだな……お前を信頼してるからこそ俺達は安心して行けるんだ」

ミラとトレイズから掛けられた言葉を聞いた瞬間にイバルは立ち上がり自身に満ち溢れた表情で叫び始める

「そういう事だったのですね！分かりました！ミラ様！トレイズ様！御2人が居ない間はこのイバルが村を守り通してみせます！！」

そう言ったかと思うとイバルは直ぐに来た道を土煙を上げながら駆

け戻っていきトレイズは髪を掻きながらその後ろ姿を見てミラに言葉
葉を投げ掛ける

「お前『も』イバルの扱い方が上手くなってきたな」

「お前も、と言う辺り君も人の事は言えないだろう？それにキリュウの教え方が上手いのだ」

「それについてはどちらも…否定出来ないな」

トレイズの言葉にミラは微笑みながら返しトレイズは上手い事返されたなと苦笑すると2人の前に突然風が吹き荒れると小さな子供と2人と変わらない年に見える女性が現われ子供が口を開く

「たつく…何時までも夫婦漫才やってないで早く行くよ」

「そうだな、もう少し見ていたい気もするがシルフの言う通りだ」

子供の様な姿をした風の大精霊である四大の一人『シルフ』と女性の姿をしたミラの騎士としてトレイズを召喚したという大精霊『キリュウ』はそれぞれ少し怒った様な表情と和やかに微笑みながらと

ミラとトレイズを見て対照的な反応をしておりシルフの言葉を聞き
2人はすまなさそうに謝るとシルフの力で直ぐにその場を飛び立った

これから更に五年後、彼と彼女の物語は大きな革新を迎え2
人は互いに己の中の『真実』に向き合っていく事となるのだが……
この時はまだ、誰も知らない……

1人は世界を守る中で世界を、人を知っていかうとする

もう1人は全てを失い世界と人の中で記憶を思い出そうとする

2人は互いに互いを守り守られながら歩み続けるが世界の『真実』
を知った時に、2人はそれぞれの信念を貫き通せるのだろうか？

これは『揺るぎなき信念を信じる』物語である

登場人物

名前：トレイズⅡラタトスク

CV：小野大輔

性別：男

年齢：15（召喚されてからな為に精霊としての年齢は不明）

身長：165cm

武器：剣

戦闘タイプ：術剣士

備考：精霊マクスウェルを守りし騎士として召喚されたミラと同じく人としての体を持つ精霊であり、現在は奉られてはいないがマクスウェル同様にニ・アケリアの人々から信仰心を持たれている。しかし、召喚される以前の記憶が無くなってしまっておりミラと共に過ごしつつも時々1人で世界を旅する事もある。

彼の使う武器である剣は普段は短剣だがマナを込める事によりマナを直接エネルギー状の光刃（簡単に言えばビームサーベル）を展開しロングブレードとしても扱える他に光刃を鞭の様に伸ばしたり光弾を放つ事も出来る他に術を使用する際に触媒の笛としても使用可能な万能武器である。

ミラが術主体な為か長く旅を共にする中でトレイズの戦闘タイプは剣を逆手に持ち剣術と蹴りを主体にした接近戦型になっている。因みに武器の形状はジュウレンジャーの獣奏剣その物である。

名前：キリユウ

CV：

性別：女

年齢：？（精霊である為）

身長：164cm

備考：トレイズをミラの元に召喚した大精霊であるがそれ以外の事は謎に包まれている

何故か四大は彼女の事を知っている様だがその事については彼女自身も含めて口にしない為にこれについてもトレイズとの関係も分かっていないが隠している事についてはトレイズ自身が契約に基き聞こうとはしていない

王都への旅立ち

ある時、元素を支配する精霊の主であるマクスウェルを名乗る彼女とそんな彼女を守る精霊が使命の為に人の体を得た

マクスウェルは四大と彼を従え人と精霊の秩序と世の平和を守る為に使命を果たし、そんな彼女を守りつつも彼は失われた記憶を取り戻す為に彼に付き従う1人の精霊と世界を見つめる旅を繰り返す

しかしながらも彼は未だに自身の記憶の一端すらも取り戻せず彼女と共に過ごす中で人の業をその瞳に移し彼は何を思っているのか……それは誰にも分からず……時は過ぎていき2人が人の体を得てから実に20年の月日が流れたのだった……

二・アケリア……ミラの社内

灯された明かりがパチパチと音を立てる社の中でミラは静かに瞳を

閉じ座っておりトレイズはそんなミラから離れ壁に背を預け腕を組みこちらも眠っているかの様に動かず座っていたが…一瞬明かりが蠢くと2人は同時に瞳を開き互いに視線を合わせると確認するかの様に話し始めた

「精霊が、死んだ…」

「ああ、俺も感じた……それもかなりの数だ」

2人は立ち上がるとそれぞれ腰に自身の剣を指すと2人以外の声が響き始める

『ミラ…トレイズ……』

「分かっているイフリート…今、大量の精霊が消えた気配を感じた」

「方角はイル・ファンの様だな……やはり黒匣クワの力だろう」

2人の周囲だけではなく社の中を見渡してもミラとトレイズ以外に

は誰の姿も《人間》の目には見えず2人が誰と話しているのか首を傾げるだろうが、2人はまるで当たり前のように会話を続ける

『黒匣^{ジン}が本当にイル・ファンにあるというのなら……世界を守る為に破壊しなければならない』

『そうでし』

『そんじゃ、行こうか』

2人の目には彼等……四大精霊達がしつかりと見えており彼等の言葉を聞きながら2人は歩み始めそれぞれ社の入り口の左右に手を掛けると四大の1人ウンディーネが2人に声を掛ける

『イル・ファンまでの遠出は久し振りですね』

『そういえばそうだな、最近は『奴等』の活動も少し大人しかったからな……』

『そうだな……さあ、行こうイル・ファンへ私は確かめなければなる

まい…全てを守る精霊の主……マクスウェルとして」

「ああ…行こう、ミラ」

その言葉を皮切りに2人は勢いよく扉を開け放ち外へ出るとミラはシルフの力を使う為に両手を前に突き出し、トレイズは懐から扇を取り出し縦に一閃し彼に付き添う精霊の名を告げる

「『キリュウ』頼む」

『心得た』

トレイズに答えたその声が響くとトレイズの傍らに四大と同じく人の目には見えない女性の姿をした精霊が彼に力を貸し隣りにいたミラもシルフの力を借り2人は一瞬で上空に飛び上がりそのままイル・ファンへ向けて飛んで行った

その直後

「ゼエ…ハア、ゼエハア……ミ、ミラ様…トレイ、ズ…様……馳せ、
参上…しま、した………」

とあるマクスウエルの巫子がそのセンサーにより村から疾走し長い階段を凄まじい勢いで駆け上がった為に息を切らしその場で倒れていたらしく彼はその後、社の階段を転がり落ちていき二日後に社の前で気絶していたところを発見されたらしい…

王都イル・ファン付近

バルナウル街道／高台

この辺りは靈勢により夜域となっている為に此所に住んでいない者にとつては時間の感覚が多少狂ってしまうだろう…そんな中で時間的には朝方に近いこの場所でトレイズはイル・ファンを望遠鏡で除いておりそんなトレイズの傍らでミラはする事もないのが不満なのかトレイズに語り掛ける

「トレイズ、何故イル・ファンに直接行かずにこんな場所で降りたのだ？それにずっと私は放っておかれて……いい加減に私は退屈だぞ」

「……………やはり此所からじゃ分からないか」

そんなミラの心中も知らずトレイズは望遠鏡を一端放し腕を組みどろろするかと考えていたがもう一度望遠鏡でイル・ファンを見渡し始めたので無視されたミラはトレイズを後ろから蹴飛ばした

「ん？……って、うおおおおお！！？」

望遠鏡でイル・ファンを見る事に集中していたトレイズは突然後ろから押された事でバランスを崩し大慌てで両手を振っているとミラに右手を捕まれ引っ張られた事で何とか落ちずにすんだ

「ミラ！お前何すんだ！？落ちたら洒落にならないだろうが！」

「なら、いい加減に私の質問に答えろ」

精霊である為にこの高度から落ちても死にはしないだろうが落ちそうになった事に恐怖は感じたらしくトレイズはその原因であるミラに怒鳴るがミラは無視され続けた事に怒っているらしく少し頬を膨らませそっぽを向きながら淡々と言葉を返しそれを聞いたトレイズは髪を乱暴に掻きながら答える

「黒匣^{ジン}が使われてる可能性がある以上、『奴等』がイル・ファンに居る可能性だってあるだろ…俺としてはそんな中にミラを迂闊に飛び込ませたくないんだよ」

「！……そうか、その可能性は確かにあるな…黒匣^{ジン}が使われているとなると『奴等』が関係していると考えるべきか」

トレイズの言葉にミラははっとした様に考え始めるがそれも一瞬の内に終わり腰に手を当てながら自信満々に言い放った

「だとしても『奴等』が関係としていとなれば余計に放っておく訳にもいくまい…それに、四大も居る何よりお前が私を守ってくれるのだから大丈夫だ」

「……………たつく……………そう言われると何も言い返せないだろうがよ……………卑怯だぜ」

『ふふつ……………トレイズ、貴方の考えも分かりますしミラの事を大切に思ってくれている事も本当に感謝しています』

『うむ、だからこそ俺達は力を十分に発揮出来るのだ』

『そうでした〜トレイズあつての僕達でしょ〜』

『だから、こんな所で何時までも突っ立ってないでドーンと行こうよ』

ミラに自信満々に胸を張って言われた事で髪をクシャクシャと掻きながら呟いていると四大達もミラの意見に同調した様でトレイズは負けたよと言いミラと四大達を見ながら話し始める

「分かったよ、但し今の時間だと街の人達の混乱が大きくなる……………少しだけ待ってくれ」

「ふむ、それなら仕方ないな…分かった」

その後、特にする事もないので暇だと言いつけるミラにトレイズは空を見上げ星座でも探してみたらどうだと言つとミラはそれは面白そうだと社で読んでいた本の知識から星座を探そうとしたがこの辺りの星座に知っているものがなく再び暇だと言いつ出したので結局トレイズが笛を奏でたり星座についての話しをして時間を潰していた

王都イル・ファン

「見分けがつく事はないが…どうやら奴等は今の所この街で表だつた行動はしていないようだな…」

あれから暫く時間を潰した後で2人はイル・ファンに人目につかない様に入り口から入らず上空からひっそりと降りて入るとミラは精霊達が消えた場所の近くを調べに行ったがトレイズは街で情報収集をしていたがこれといった収穫も無かつた為にミラの元へ向かおうとしたのだがその途中で人々が口にする噂話を耳にし歩みを止めた

その噂話とは最近街で人が突然居なくなるというものなのだがどうもその噂がおかしいのだ…行方不明届けを出した直ぐ後に王都から直ぐに何かしらの返事が返ってくるらしいのだ

街の人々は兵士達が一生懸命に探してくれていると感謝している者ばかりだったが余所者であるトレイズからすればこれはおかしな話しだと直ぐに気が付いた

「まさか…自国の民で実験を行っているというのか?…早い所ミラと合流した方がよさそうだな」

そう言いトレイズはミラと合流する為に彼女が居る筈の精霊達が消えた場所へと駆け出した

出会って別れてまた出会う

王都イル・ファン
研究所／下水道入り口

「じゃあ、もう一度説明してみようか」

「な、なあトレイズ…早く行った方がいいと思うんだが…」

今、ミラとトレイズの2人は本来なら下水道の入り口に填められていた筈の格子が破壊された前におり、ミラはトレイズに正座をさせられておりトレイズは笑顔が怖かった

「ミラ」

「ああ…」

「もう一度、説明してくれるか？」

「……………はい」

ミラはトレイズの笑顔という名の恐怖に負けほんの少し前に起こった事をポツポツと話し始める中で2人以外には見えない四大達は居心地が悪そうにしていた…

トレイズがミラに合流する少し前

『ミラ、いいのですか?』

「何がだ? ウンディーネ」

イル・ファンの精霊が大量に消えた場所を人目にあまりつかない水の上ミラはウンディーネの力を使い歩いてきたがそんな力を貸して貰っているウンディーネから尋ねられた事にミラは首を傾げる質問

で返す

『トレイズには1人で無茶をするな、自分だけで何とかするなって言われてたじゃん?』

『なのにこんな事しちゃっていいんでしか?』

『……………むう……………』

ウンディーネに続いてシルフにノームが次々に言葉を投げ掛ける中でイフリートはそれらの原因を作った為に唸る事しか出来ずミラはそんな四大達を見渡すと口を開く

「とは言え、これは私の使命だ。トレイズにあれもこれも頼る訳にもいかないだろう……それに私だってちゃんと出来るという事をトレイズには知っておいて貰いたいのだ」

そんなミラを見た四大達は互いに顔を見合わせると頷き合いミラに同意した様に話し始める

『分かりました』

『俺達は主であるミラに従おう』

『それにミラの言ってる事にも一理あるしね』

『でー』

「皆、ありがとう……ん？」

四大達に改めて感謝の言葉を掛けようとしたミラは背後に人の気配に加え足音と声が聞こえてきたので振り替えるとそこには1人の少年が自身が歩いてきた陣の上でうろたえていた

普通ならミラはこんな所に居るのかと尋ねられても何とか答えを返せるのだが彼女は先程イフリートに水路の入り口に詰められていた鉄格子を熱で融解させていたので下手に騒がれてはマズいと思い人差し指を口許に持っていき小声で少年に語り掛けようとするが少年も慌てながらもミラに語り掛けようとしてきた

「いつ!?!?.....キユウ.....」

「しまった.....」

慌てていた事もあり少年は水の中で暴れていた為に姿勢が代わり水が急に消えた事でミラ達が立っていた石床に後頭部から落下し気絶してしまいミラが慌てていると上にある橋から人影が自身の前に飛び降りてきて彼女と少年を交互に見てからミラを見つめ疑問を投げ掛ける

「.....ミラ、何やってるんだ?」

「トレイズ.....えと.....これは、だな.....」

そして、時は冒頭に戻る

「何してんだ？お前」

「……………すまない……………」

説明を聞き終えたトレイズは呆ればいいのか怒ればいいのかよく分からずミラを見ながらため息を吐き、ミラは視線をトレイズから放し四大達は気絶して横にされている少年を困いシルフに至っては見えない事をいいことに頬をつついていた

「はあ…過ぎた事は仕方ないとして……………どうするかな放っておく訳にもいかないが俺達もゆっくりしている訳にもいかない……………お」

トレイズが少年をどうするか迷っているとシルフに頬をつつかれ頭

上をノームがグルグル回り付近にイフリートがいる事で熱帯になり
そんな状況をウンディーネに見られていた少年は目を覚まし周囲を
見渡しトレイズにミラと目が合うと大声を出そうとしたのだが…

チャキツ

「俺のツレが原因なのは悪いと思うがこっちも騒がれては困るんで
な……静かにしてくれるな？」

「（コクコクコク！）！！！」

表情は申し訳なさそうだが目的の為に非情となったトレイズは懐に
忍ばせていた投げナイフを少年の首へと突き付け警告すると少年は
ミラの時と同じ様に慌てて首を縦に振りそれを見たトレイズは投げ
ナイフを懐に戻しミラと共に融解し破壊された鉄格子があつた場所
へと歩いて行く

水路の中を進んで行くトレイズとミラは互いに一言も喋らず黙々と歩き続けるがその沈黙には違いが見て取れる

トレイズは水路の中という暗さもあり無表情に見え只、何も話さずに歩いているだけという感触だがミラの方はそんなトレイズをチラチラと見ながら何か言おうとしているが中々言い出せない感じでありそれを見兼ねた四大達がミラの代弁をする様にトレイズに語り掛ける

『トレイズ…』

『怒ってるでしか〜？』

「は？どうしたんだいきなり…」

イフリートとノームの問い掛けにトレイズは足を止め背後にいる四大達とミラの方へと振り返るとウンディーネとシルフが話しを引き
継ぐ

『ミラが貴方の言い付けを守らず勝手に行動しようとした事にです』

『あれは僕達にも責任があるしさ…ミラの事を許してあげてよ』

「……………そんな事か…たつく……………ミラ」

「っ……………痛っ!？」

四大達の話しから大体の事を察したトレイズはミラに呼び掛け近付くがミラはまた怒られると思いい視線を逸すが額に軽い衝撃と痛みを受け額を押さえながらその場にしゃがみ込んでしまう

「お前は精霊の…俺達の主であるマクスウェルだろうが…それが俺に対してそんなにビクついててどうする」

「っ……………それはそうだが……………」

「分かっているならもっと堂々としてろ、お前がやった事は確かに失敗もあったが間違っではないだろ……………俺はそんなミラだから一緒に居るんだ」

額を押さえ若干涙目のミラは彼女に打ったでこピンをした右手の指を同じ様に動かし続けるトレイズの言葉を聞くと、そうだなと頷き2人は意気揚々と歩き出し四大達はそんな2人を見て笑っていた因みに先程から喋っていないキリユウはどうしているかと言うと彼女はノームよりも寝る事が大好きな精霊であり大抵はトレイズが持つ彼女が宿る扇の中で眠っているのである

「しかし…これ程の施設とはな」

『此所まで大きいとなるとこの施設はラ・シュガルの軍事施設という事ですか』

「そうなるだろうな相当大掛かりな計画を進めているな」

「それについてだが街で色々調べていたんだが…奴等の事は分からなかったが不穏な噂を聞いた」

『不穏な噂でしか？』

ミラとウンディーネの会話にトレイズは街で耳にした気になる噂を

思い出しノームが聞き返すとトレイズを歩いたまま組んでいた両腕を崩し右手を口許に持っていき語り始める

「最近、このイル・ファンを始めとして人が居なくなっているらしい…それも殆どが靈力野^{ゲイト}が発達している者らしい」

『まさか…』

「自国の民を何かの人体実験に使っているというのか？」

「ああ、行方不明の届け出が出されて直ぐに王都の兵士達から何らかの報告がされているらしいからな…その可能性は高いだろう」

『なるほどな…無関係とは考え難いな』

トレイズの話しを聞いたミラは顔をしかめ四大達も怒りを感じているようでありトレイズも声には出さない様になっているが先程から口許を手で覆っているのは怒りを表情に出さない様になっているのだろう…歩いている中で今度はトレイズがミラに尋ねる

「ミラ達の方はどうだったんだ？」

「ああ周辺一帯から微精霊達の気配もばったりだ」

『静か過ぎて怖いくらいだよ』

『ええ、本当に精霊達の気配を全く感じませんでした』

トレイズの問い掛けにミラは重々しく返しシルフとウンディーネもそれに同調し答えるがその表情はかなり暗いものである

「同時に感じたあの異様な力…精霊達を吸収した源がここにあるのは間違いないだろう」

「精霊の気配が此所までないという事は…やはり黒匣^{ジン}か」

『ああそついう事になるだろう』

「何故人は世界を破滅に向かわせる力を求めるのだ…黒匣^{ジン}がなくなるとも生きていけるといふのに…」

『その通りでしょ』

「全くだ……何時の世も人は争いを求めるといつのか……!？」

四大達にミラと話しながら歩いてきたトレイズだが今の会話をして
いた時にまるで自分は遠い昔にもそれを見ただけでなく当事者とし
て体験したかの様な感覚に捕らわれると同時に頭の中に何かのイメ
ージが浮かび上がる

『な……貴様……争……を……める』

『ち……ら……求……続……そ……先……破……だ』

トレイズは突然頭の中に浮かび上がってきたイメージに混乱しつつ
痛みで頭を押さえその場にしゃがみ込むと心配したミラが直ぐ隣り
から不安そうな顔で尋ねてきた

「どうした!?!トレイズ!大丈夫か?」

「あ……ああ、大丈夫だ……頭の中に何か浮かび上がってきただけだ」

「！記憶が戻ったのか!？」

トレイズの言葉にミラは驚愕しつつトレイズに問い掛ける……無理もないこれまでの20年間で全く得られなかったトレイズの記憶の手掛かりが得られそうなのだから

「いや……何かが見えた気もするが記憶に関しては何も思い出せない」

「そうか……しかし、大丈夫か？」

依然として心配そうに自身の顔を直ぐ横から覗き込んでくるミラに微笑みながらトレイズは彼女の頭を撫で立ち上がる

「大丈夫だ、心配してくれてありがとな……だがお前こそ油断するな

よっ」

『トレイズの言う通りです油断し過ぎては駄目ですよ ミミラ』

「フツ…お前達四大を従え何よりトレイズが私を守ってくれるのだろっ？油断はしないが恐れるものはないだろっ」

立ち上がったても頭を撫でられているミラはトレイズとウンディーネの言葉に胸を張り自信満々に言いつつトレイズにだろっ？と言いつつ目配せをする

『2人共、悪いが話しはそこまでだ…幾つか足音が近付いてくる…
…急いだ方がよさそうだ』

「どっやら侵入した事がバレちゃったみたいだな…ミミラ」

「ああ行くぞ、トレイズ」

いつの間にか出て来たキリュウの言葉にトレイズは近くにあった梯

子を発見するとそれを掴みミラを見るとミラも頷き2人は梯子を昇り研究所へと侵入していく

王都イル・ファンノラフォート研究所

水路から研究所の中へと侵入したトレイズとミラは早速調査を開始したのだが広い上に殆どの部屋はロックが掛けられており鉄格子の様に鍵を力ずくで破壊する訳にもいかないので仕方なく虱潰しに一部屋一部屋調べていたのだった

50

「中々見つからないな……」

「そうだな……ン？これは……」

虱潰しの調査だがあまり時間が掛けられない為に焦り始めた2人だがトレイズは床にしゃがみ込みそれを見たミラは首を傾げながら近寄り問い掛ける

「どうした？」

「床が濡れている……」

「それは私達が此所に来る前に水路で聞いた足音の兵士達のものじゃないのか？」

「いや、これは水路を歩いていた位でつく量じゃないまるで水の中に落ちた様な……あ」

『……もしかしてあの少年でしょうか？』

『マジ？』

水の足跡を追い一つの扉の近くまで来たトレイズは自身の言葉に此所に入る前に巻き込んでしまった少年を思い出しウンディーネとシルフもその可能性に辿り着く

「やれやれ……早く帰った方がいいと警告したのだがな」

「まさかこの施設の関係者だったのか？もう少し話を聞いておくべきだったかもしれないな」

『わあああああっ…!!』

ミラとトレイズが自身達が巻き込んだあの少年の事を思い出していると目の前の部屋から叫び声が聞こえてきた

「丁度いい…この部屋が空いているなら端末が使える筈だ風漬しの手間が省けそうだぞ？」

「なるほどそれは良い案だ、それでいこう」

《ドガアアアンツ!!!》

ミラに問い掛けた承を得たトレイズは扉を蹴り開けると同時に部屋の中から感じた殺気に向けて火の精霊術を放ち殺気を放っていた人物を壁に吹っ飛ばしミラを連れて押し入った部屋の中に居たのは予

想通りあの少年だった

「やはり君だったか少年」

「早く帰った方がいいと警告した筈だぞ」

「え、あ……すみま、せん……」

部屋の中で背中から倒れ込んでいた少年を見てトレイズとミラはそれぞれ言葉を投げ掛けその少年はというと突然の出来事の急変で出会った時と同じ様に惚けた受け答えをしていた

「おいコラア！！いきなり人をぶっ飛ばしておいて無視してんじゃねえよおおお！！！！」

「それなりに力を込めたんだが気絶していなかったか…一般兵という訳ではないようだな」

そんな話しをしている間に部屋から駄々漏れな殺気を放っていた為

にトレイズがぶっ飛ばしていた少女が立ち上がりトレイズ達に叫んでいた

「アツハハハハハ！そっか！侵入者ってあんた達の方かあ！」

「先に手を出したのはこちらだが…どうやら最初からこちらの話を大人しく聞いてくれる様な相手では無さそうだな」

「ああどうやら強行手段の方が手っ取り早い相手みたいだな」

ギヤハハハハと叫ぶ少女を見てミラは鞘から引き抜いた剣をトレイズは右足のホルスターから引き抜いた短剣を腕輪に刃を滑らせ軽く刃を研ぐ様に火花を散らせ短剣にマナを直接光刃に変化させ纏わせたロングブレードを構える

「少年そこで大人しくしている…直ぐに終わる」

「直ぐに終わる？面白い事言ってくれるね…いいよ、あんた面白そうじゃん！さっきの躊躇の無い術といいあんた最高だよ！……だからあんたから殺してやるよおおおー！」

「ミラ！援護を頼むぞ！」

その言葉を皮切りに少女とトレイズは同時に駆け出し互いにロングブレードと剣をぶつけ合うが技量的にトレイズが少女を押ししていく

「ぐっ…いいねえ！あんた言うだけあるじゃんよおおお！乗ってきてたああああ！！！」

「そうか、盛り上がっている最中で悪いがこれで終わりだ」

そう言い横に飛び退いたトレイズを視線で追いついていた少女は意味が分からないといった感じでふざけてるのかと言おうとした瞬間に目の前をはっとして振り返った先には…

「頼むぞイフリート！！！」

「なっ！ふざけんなこっからが！！！！！」

《ウオオオオオ!!!》

少女の視線の先ではトレイズの時間稼ぎで充分に力を貯める事が出来たミラがイフリートを使役し少女は文字通りの豪火で壁に叩き付けられその凄まじい威力に気を失ったらしく力なく倒れ伏した

「さて、大丈夫か？少年」

ホルスターに納めていくとロングブレードの刃を形成していたマナが分解していき短剣をホルスターに戻したトレイズは何とか立ち上がった少年に問い掛けた

真実への始まりを告げる鐘は鳴り響く（前書き）

自分で書いていて何故此所まで長くなった上に凄まじい展開になったのかが分からない（汗）

多分次回からは通常通り短いですが、はい

真実への始まりを告げる鐘は鳴り響く

カタカタカタ…

先程までの戦闘が嘘の様な静寂に包まれたこの部屋の中でトレイズが操作する端末のキーボードの音だけが響いていく

ミラはトレイズの作業が終わるのを待っている間に部屋の中を調べながら放っておく訳にもいかないので少年に話し掛け始める

58

「まったく…警告はした筈だぞ？それとも君はこの研究所の関係者というわけか」

「うっん違う、ごめんなさい……あ、あの……」

「どうだトレイズ何か分かったか？」

未だ混乱している少年はおろおろしながらミラに受け答えし話し掛けようとしたがミラは部屋の二階で端末を弄っていたトレイズに尋ね掛け声を掛けられたトレイズは端末の操作を打ち切りミラの側に飛び降りてきた

「ああどうやらこの部屋とは別の場所に黒匣^{ジン}はある様だ…その場所も分かったぞ問題はこっちの方だな」

そう言い部屋の中に複数存在する縦長の巨大な水槽の様な実験装置に入れられている人達にトレイズは視線を移し近付いていきミラも装置を見上げる

「これも黒匣^{ジン}の影響という訳か…どうやらあの噂話の真実はこういう事だったようだな」

「神隠しの真相は自国の民を誘拐しての人体実験に使う被験者の確保だったという事が…」

「ジン…？…それに人体実験ってどういうこと？貴方達は何を知っているの？」

トレイズとミラは少年の事を放置し2人だけで色々と話し始めたが状況についていけず不安で一杯な少年は会話の中に出てきた単語や人体実験という言葉で更に混乱してしまいトレイズに尋ねかける

「ああ無視していた訳じゃないんだが…すまないな、とにかく此所を早く去るといいこれ以上居ても厄介事に巻き込まれる事はあってもいい事はない」

「そうだな、次も助かるといふ保証はない…早く帰って今日起こった事は忘れてしまった方がいい」

まだ先程の戦闘による死への恐怖が抜け切っていないらしく不安を何とか押し殺しつつ話しかけてきた少年を見たトレイズとミラは早めに立ち去ったほうがいいと言葉を返すと未だに気を失っている少女の荷物を物色しその中からこの施設の扉を開ける鍵であるカードキーを抜き取ると部屋から出て行くこととする

「あ……あの待って！」

しかし部屋から出て行こうとした2人の足は少年の慌てた様な声により止まられトレイズはどうかしたのか疑問に思いミラはとうとうと警告したのに今度はなんだと思いつながら少年の方へ振り返り尋ね返す

「どうした？少年」

「まだ何か用があるのか？」

「えっと…あてがないんだ教授と一緒になら此所から出られたかもしれないけど…僕もついて行っていい？」

少年のその言葉を聞いたトレイズとミラは最初は何を言っているのかわからないといった表情できょとんとしていたがそれぞれ微笑し始めたので少年が再び口を開こうとするがそれより先に少年の意図を理解した2人が話し始める

「ふふっ…なるほどそれなら次も助かるだろうし一人で右も左も分からないこんな場所を歩くよりは安全だろう」

「確かにその通りだ君は面白いな！いいだろう」

「えっとありがとうございます…僕はジュード…マティス貴方達は？」

「私はミラ…マクスウェルだ」

「トレイズ…ラタトスクだ」

2人は面白いと同時に以外にしっかり物事を考えている少年、ジュードに興味を持ったのか自己紹介しそれぞれ差し出された手を交互に握り返した

ラフオート研究所／通路

「それにしてもマクスウェルって精霊の主と同じ名前なんて変わってるね」

「同じも何も本人だからな」

「ええっ嘘！？本当なの…？」

通路を歩いている中で先程の自己紹介で聞いた名前の事を思い出し好奇心からジュードはミラに話し掛けるが返ってきた答えに驚愕しトレイズとミラを交互に見ながら尋ねそれに歩きながらトレイズが答える

「ああ本当だ君もさっきミラがイフリートを使役しているのをみた
だろう？あれが何よりの証拠だと思うが…」

「そういえば確かに火の大精霊を直接使役していたけど、何処から
見ても人間の女の人にしか…」

「それは当然だその様に私達は体を創ったのだから人間に見えな
ければ困る」

「そう、なんだ………って！『私達』って事はもしかしてトレイズ
も！？」

「ああ俺のこの体も20年前にミラと同じく人の体として創ったものだ」

「そうなんだ……じゃあミラの名前と同じでトレイズはラタトスクっていう精霊なの？」

ジュードの質問に何故かトレイズではなくミラはがうむ、と頷きながら答える

「トレイズは私を守る為に私と共に召喚された精霊でな大精霊である四大達に遅れをとらない程の凄まじい力を持っているんだ」

「よ、四大精霊と同等の力！？……でもそういえばラタトスクって名前何処かで聞いた事があるような……」

歩きながら何とか思い出そうとこめかみを掻くジュードを見てトレイズは思い出した様に足を止めて疑問を投げ掛けた

「ところで少年はこのまま俺達についてきていいのか？」

「え？どういふ事？」

「いやついでくるなとかいふ意味ではなく、あれだけ警告されたにも関わらずこんな所に忍び込んでいるんだ何か用事かワケがあったんじゃないのか？」

トレイズの言葉にジュードは表情を暗くしながら2人に警告された後にどうして後を追う様にこの研究所に忍び込んできたのかあの部屋で何があったのはポツポツと語り出した

ジュードはこの王都イル・ファンにて医者の卵の学生として日々を過ごしていたという

しかも彼を教えているハウス教授にはかなり目を掛けられており今日もその教授の手伝いをしていたのだが教授がオルタ宮からの依頼で留守にしている中で教授が表彰されると伝えにきた人から聞いたジュードは帰りが遅い事が心配なのとそれを一刻も早く伝えてあげたいと思いいこの研究所に来たのだが入り口では既に帰ったと伝えられ出門表を見せられたらしい

しかしそこに書かれた筆跡はたまたまジュードが持っていた先刻教

授に書いて貰った署名の筆跡とは違っており疑問に思っているとその紙が風に飛ばされそれを追うと水の上を歩いていたミラを見つけそのまま紙を拾いにいった所で例のミラの失敗に繋がったらしい

そして結局2人が開けた穴から水路を通り自身も研究所の中へと忍び込んだはいいものの兵士に突然拘束どころか殺されそうになり何とか撃退した後にあの部屋へと辿り着いたらしい

そしてその部屋の中でジュードは探していたハウス教授を見つけたもののそこにはオルタ宮直々の依頼だと意気揚々に張り切っていた姿は無くあの部屋に居た者達と同じく実験装置のカプセルの中に入られており苦しみ悶える中で次第に動かなくなり遂には消えてしまったらしい

そしてその何が起こっているのか分からない恐怖の中で突然あの少女が襲ってきて危うく殺されそうになった所をトレイズの精霊術に助けられ今の状況に至るらしい

「なるほどなハウス教授という人の霊力野^{ゲイト}はかなり発達していたんじゃないか？」

「うんその通りなんだハウス教授の治癒術の技術は凄く高くてそれで色々な論文も書いていたし僕は凄く尊敬してたんだ……なのにあんな事になっちゃうなんて」

「トレイズ、オルタ宮直々の依頼で呼び出されたという事はやはりこの研究所で行なわれている事は……」

「ああこの研究所で行なわれている実験を指示し進めているのはナハティガル王に間違いはないだろう」

オルタ宮から直々の依頼で研究所に呼び出されたというのに実験材料にされたという事はそもそもその依頼がハウス教授をこの研究所に連れてくる為の口実になるのだろう

そしてその依頼に加えて出門表に偽造までしてサインが残されたという事は研究所はハウス教授を帰すつもりもなくそれらを纏めて考えていくと研究所はオルタ宮からその様な指示を受けている事になりつまりはこの命令を出したのはラ・シュガル国王のナハティガル王という事になる

「そんな……王様が自分の国の民を実験材料にしてるって……!?」

ジュードは信じられないといった表情でついつい叫ぶが今自分達は研究所内では兵士達が血眼になって探しているである。あるいは侵入者であるという状況を思い出しはっとなつて口を塞ぐ

しかしジュードはトレイズ達を追つて水路を進んだ時にこちらの事情を聞いて自分が居なくなつた時に誰かが騒ぎ立てないか聞かれ友達もろくにおらず両親と離れて寮生活を送っている。ので特に誰も騒ぎ立てないと説明した時にそれを聞いてきた兵士は問答無用で自分を拘束しようとしてきた上にもしからしたら口封じとして殺されていたかもしれない状況を思い出す

もし殺されなかつたとしても拘束された後は口封じ兼実験材料としてハウス教授と同じ様な状況となり結局は死んでいただろう。それを理解したジュードはつい先刻までは教授に目を掛けられる期待の医学生として病院で掛かり付けのような関係になつた患者を診ていた。今まで普通に過ごしていた日常が非日常へと突然変わつてしまつた事に驚き状況についていき切る事が出来なかつた

しかしそもそもその原因は自分のお節介な性格にある為に誰かを責める訳にもいかなかつた。ハウス教授に早く伝えたい心配だつたからと研究所に赴きそこからはいけない事だと思いつながらもトレイズ達の後を追いつた。この研究所に忍び込んでしまつた事が自分をこんな現状にしてしまつた原因である

ハウス教授を失つた悲しみに加え医学生として暮らしていた中で街の外を旅している訳でもなく突然訪れた死の恐怖や知つてしまつた人体実験の事等でジュードは今更ながらに後悔の渦に巻き込まれる事になり自分自身の行動を責めていた

『ミラ、トレイズ急いだ方がいいぞ』

『先程の戦闘で人が集まり始めている筈です』

「うむ、そうだな…すまないがジュードあまり考え込める程私達に時間的余裕はないそろそろ行くぞ」

「?…あ、うん」

四大はマナの塊である為と同じ精霊であるミラとトレイズの目にしたか移らずその声も聞こえないのであるの部屋で会った時から2人と四大の会話はジュードから見れば誰と話しているのかどころかこちらに語り掛けているのかすらよく分からず首を数回傾げていた

「しかしあの少女は何だったんだ気絶させる事に止どめようと思いを弱めたがそれでも俺の精霊術を食らって直ぐに立ち上がったくるとは一般兵士とは思えない」

「確かに私達を侵入者と言ったが言動や行動を見た限りではこの施

設の正規兵とは思えない反応だったな」

「僕も一般人なのにいきなり攻撃を受けたんだ…それでも水路で会った兵士達と違って口封じみたいな感じじゃなくて…：…只、殺したかったって感じだったよ」

3人はあの部屋でトレイズとミラが使役するイフリートが圧倒し撃退した少女の事を思い出していた

あの少女の事は実際に剣を交えたトレイズとあのまま2人が来なければ殺されていたであろうジュードは特に違和感を感じていた服装を見るからにこの施設の見回り等をしている正規兵には見えなかったし逆にあれだけの腕を持つ者が一介の研究者であるというのも納得がいかない

それにも関わらず少女の言動はこの研究所の事がある程度把握しているようだったしあの部屋で端末を操作していた事から侵入者かとも思ったがそれならこの研究所のカードキーを持っていたのはおかしい話であり謎は深まるばかりでミラとトレイズは思考を切り替え当初の目的を果たす事にした

「トレイズ方向はこっちのほうでいいんだな？」

「ああ地図が間違っていないならこの先にあの部屋を始めとした人

間から吸い出したマナが集められている部屋がある」

トレイズはあの部屋で端末を操作し調べた結果この研究所にはあのような人間の霊力野^{ゲイト}からマナを本人の意思に関係なく死ぬまで強制的に吸い出し続ける装置を設置された部屋が存在し吸い出されたマナは装置からある一つの部屋に集められているようだった

「ねえ：2人共もしかして出口じゃなくて研究所の奥に向かっているの？逃げないと危ないんじゃないかな？」

2人の会話と足取りからどんどん研究所の奥へ奥へと向かって行く事を理解したジュードは不安そうに尋ねる

「危険なのは承知しているが元々私達はこの研究所の中にあるであらうとある物を探しに来たのでな」

「これ以上危険に巻き込みたくはないが俺達には俺達の果たさなきゃならない目的があってな悪いが付き合ってもらおう」

「そっか…うん分かったよ一緒に行くって言ったのは僕だからね」

若干申し訳なさそうに言う2人の言葉を聞いたジュードは自分が決めた事だからと付け加えそれを聞いたミラとトレイズはそれぞれ微笑していたのだが

『ふむ子供にしては中々割り切った考えをしているな』

『素直な子でしね』

『どっちかって言うと苛められっ子みたいなタイプだな』

『我々に付き添わせて大丈夫でしょうか？』

『彼だけじゃなくミラとトレイズも決めた事だし放っておく訳にも
いかないじゃない』

そんなジュードを見てキリュウに四大達は次々に言いたい事を言いそれを聞いたトレイズはため息を吐きミラは多少可哀相だと思っただのか注意するが精霊達からすればミラとトレイズの事が第一な為にしようがないだろう？と言われてしまい2人は多少考え込むと歩み

を止めてジュードを見つめる

「ど…どうしたの？2人共急に止まるし黙り込んで」

ミラとトレイズの急な変化に加えいきなり見つめられた事によりジュードは自分が何かしたのかと焦り始めるが次の瞬間に2人から掛けられた声で驚愕する

「よし！撫でてやろうジュード！」

「……………は？」

突然過ぎるその言葉に加え何がどうなってどういう考えをすればそんな結果に思考が行き着くのか分からないジュードは頭を貸せと言い自分の頭を多少乱暴に撫で始めるミラとトレイズの行動の真意がよく分からずどうしたの？と問い掛けると予想外の答えが返ってきた

「人は元気がないときに撫でられると喜ぶ事があると本で読んだ！

確か『魔法の手、瞳は鏡』…だったか？」

「いや『幸せな未来、優しい明日』じゃなかったか？」

「それどっちも育児本じゃない！僕は赤ちゃんでも2人の子供でもないよ！？」

ミラが撫でるのを止めて本のタイトルを思い出そうとしてトレイズも髪を掻きながらそれに続く…やはりトレイズも精霊なのか若干天然な様である撫でられたジュードはというと本のタイトルを聞き恥ずかしそうに叫びそれを聞いた2人は間違っていたのかと思えばツが悪そうにジュードに話し掛ける

「そつなのか？」

「む…君には適さない方法だったか？」

「……………あはははっ少し気が楽になった気がするよ、ありがとう2人共」

ジュードは撫でられていた場所に触れると笑いだし笑顔で感謝の言葉を伝えるとミラとトレイズも笑顔で返しジュードに元気が出た事を喜び再び目的の部屋へ向けて歩き出した

ラフォート研究所
クルスニクの槍 機関部

「何なの……これ」

「なるほどなあれだけの人をさらってきた上にあそこまでマナを吸い上げる訳だ」

「やはり黒匣クワの兵器だったか…しかしこれ程の大きさとはな」

ミラとトレイズがこの研究所に侵入した目的の物があると予想された部屋にはとてつもなく巨大な兵器がありそれを前にして今までこれ程までに巨大な兵器を見た事がないジュードは驚愕を露わにしておりミラとトレイズはここにある兵器は予想していた通りの代物であつた為あまり驚いてはいないが予想よりも遙かに巨大な黒匣ジンに冷や汗を流していたがトレイズは直ぐに兵器に備え付けられた端末に近付くと操作し始めるとモニターには物凄い速度でこの装置の概要や発動させる為の術式等が目まぐるしく次々に移り変わっていく

カタカタカタ…ピピッ

「『クルスニクの槍』…だと？創世記の賢者の名前をわざわざ黒匣ジンの兵器につけるとは高慢だな」

「クルスニクを冠するとは…これが人の皮肉というものか」

トレイズとミラは目的を果たす為に2人だけの世界に入り次々と話しを進めていきその話しについていけないジュードは後ろで2人の会話を聞いているだけしか出来なかつたが目の前にある兵器が尊敬していた教授の命を奪った物だと思つたと自分にも何か出来ないかという気持ちになつたのかトレイズに近付く

「ねえ僕にも何か手伝えそうな事…」

「!！」

ジュードに後ろから声を掛けられたトレイズは彼の方を振り返り口を開こうとしたが直ぐに彼に駆け寄り足を刈る様に蹴り飛ばせると転ばせられたジュードはうわつと驚き声を上げると同時に何故こんな事をしたのか問い掛ける為に口を開こうとしたが開いただけに止まり声が出される事はなかった

ヒュンッ!

「……………え?」

先程までジュードが立っていた場所を黒い何かが通り過ぎ地面に突き刺さった、それを見たジュードはもし自分があのままそこに立っていたならこれに自分は貫かれて運が悪ければ死んでいたと理解し顔を青褪め一方のトレイズとミラは直ぐさまに地面に突き刺さった黒い歪な槍の様な物が飛んできた方向を睨み付ける様に見るとそこには明らかに人ではなく精霊でもない『異形』の姿があった

「何者かは知らないがこの研究所の奴等の差し金ではないが狙いは俺達で間違いなさそうだ…しかも厄介なオマケ付きか」

「この忙しい時に!」

どうやらあの異形はこの研究所の者達がトレイズ達の追撃に出した存在では無いらしくその証拠にその背後にある出入り口からは無理矢理此所まで来た証拠であろう爆発や破壊の後である煙が見える上に先程までは侵入者の事も穩便に済ませたかったであろう研究所も奴によって被害が出たらしく耳をつんざく様な緊急事態を告げるサイレンの音が響き渡っていた

78

「ミラ時間がない俺が奴の相手をしている間にこの黒匣^{ジン}を破壊しろ」

「分かったそっちは任せたぞ」

短い2人の会話が終わるとミラはクルスニクの槍へと近付きトレイズは異形を見据え剣をホルスターから引き抜き構えるが何かを思い出した様にはつとなり視線はこちらを伺う様に動かない異形にむけ

たまま背後に向かって叫ぶ

「ジュード！君をこれ以上俺達の事情に巻き込む訳にはいかない！誰かに見つからない様に柱の影へ隠れている！！」

「え！？で、でもあんな奴を相手にトレイズ1人じゃ！」

自身の事を気遣ってくれているトレイズの言葉にジュードは自身のお節介な性格から共に戦おうとするがトレイズはその言葉を遮り誇る様に叫ぶ

「心配するな俺はミラを…マクスウェルを守る為の存在…精霊騎士だあんな奴には負けはしない俺を信じる！！」

その言葉と同時にトレイズは剣をまるで上空を貫く様に掲げその姿を見たジュードは何をするのかわからないが言われた通りに近くの柱にその身を隠しミラはトレイズが何をするのか理解した様で自身の成すべき事をする為に両手を前に突き出し四大達の力を解放する陣を展開する為に集中していくとトレイズは剣を上空に円を描く様に振るうその瞬間に剣先の延長であるトレイズの真上に剣の軌跡が実体化した様に光り輝く円が現われる

「これは…精霊、術なの？」

ジュードの視線の先ではトレイズが上空の円から溢れ出した金色の術式とも違う帯状の文字をその身に纏っていきその光景にこれは精霊術なのかと混乱していると次の瞬間、帯状の文字の羅列を四肢に纏ったトレイズが強く光り輝きジュードはそのあまりの輝きの強さに腕で覆いながらも瞳を閉じてしまい次に瞳を開いた時にはそこにトレイズの姿はなかった…いや、正しくは『自身の知る』トレイズの姿が無くなっていた

「き、金色の鎧の…騎士…？」

ジュードが見つめるトレイズの姿は正に自身が口にした言葉の通り頭部は狼を模し体は鋭い刃の様な力強い印象を受ける正に黄金に輝く騎士がいた

この世界ではその名以外の称号も意義も無くなり只、彼の目的である精霊と人の秩序を守りしマクスウェルを守る存在と化した騎士の背後に一瞬金色に輝く陣が輝いたかと思うと左手に持っていた鞘から鎧と同じく金色に輝く柄を握り締め剣を引き抜き異形に向かい今の姿の己を示す名を叫んだ

「我が名は『牙狼』！マクスウエルを守りし！『精霊騎士』だ！
！」

その叫びと共に金色の精霊騎士は異形が侵入してきた遙か上まで一
気に飛び上がっていった

S I D E
牙狼^{トレイヌ}

黒匣^{ジン}の破壊をミラに任せた彼は彼女を守り彼女の使命を果た
す事は阻む存在を倒す為に単身敵に戦いを挑んでいた

『ハアアアア！！』

異形へと一直線に飛び上がり近付いた俺はその手に掴んでいた剣を異形へ向けて振り下ろしたが奴はその一閃を躲すと俺との距離を取るそれも予想の内だった俺は自身の精霊騎士への変化と共に変化した剣である牙狼剣を構え直すが俺の背後に居るであろうキリュウの声を聞き動揺した

『ラルヴァ…遂に実体化するまでに至ってしまったか』

『奴を知っているのか？キリュウ！』

キリュウが目の前にいる奴の事を知っているとは思ひもしなかった為に動揺していたがキリュウの来るぞ！という言葉聞き目の前に迫ってきていたまるで2足歩行のライオンの様な異形…ラルヴァの突進を横に飛び避けると同時にキリュウに叫ぶ

『今はこの質問にだけ答える！こいつも俺の失われた記憶に関係しているのか！？』

『……その通りだ、ラルヴァはお前の失われた記憶と何よりお前自身に深い関わりがある』

『！……此所から脱出したら話して貰うぞ！』

『ラルヴァに勝つ…いや黒匣^{ジン}の破壊が既に前提条件か』

俺の答えにキリュウはふふつと笑いながら俺に語り掛けるがそんな事は当たり前が決まっている…何故なら

『当たり前だミラはマクスウェルであり俺はそんなミラを守る為の精霊騎士だ！相手が誰であろうと俺は決してミラの前で負けはしない！』

その言葉と共に俺は牙狼剣を腕の鎧で研ぐ様に滑らせ構えるとそのままラルヴァへと向かっていく

S I D E O U T

斬・突・払、剣を使うならば先ずはこの三つ攻撃手段を習う事から始まる要するに種類がどうなるうとこの三つに剣術の基礎と全てがあるとも言えるからだ…つまり、それを極めると

『セリヤアアア！！』

《グギアアアア！！》

その三つは極めればどの様な敵であろうと対処が可能であり絶大な威力を誇る事をラルヴァとの戦闘で牙狼ことトレイズは証明していた

自身に向かつて叩き付ける様に頭上から振るわれた腕を最小限の動きで躲すと重い代わりに速度が無い一撃を躲され尚且つその巨体のせいで弱点ともなるラルヴァの懐に潜り込んだ牙狼は鋭い横薙ぎの一閃を叩き込みそれを受けた呻き声を上げる巨体なラルヴァの眼前に飛び上がり牙狼は容赦なく追撃を加える

『ハアツ！！』

空中から放たれた回し蹴りはラルヴァの横顔に吸い込まれる様に直撃しその威力の凄まじさを物語る様に地面に火花を立て吹き飛ばされたラルヴァは壁に激突し、その衝撃で周囲の壁に罅が入ったかと思つと頭上の部分が崩れ落ち煙と崩れ落ちてきた破片でラルヴァの姿は一時的に見えなくなる

しかし牙狼はそこでラルヴァに休ませる暇を与える事はせずラルヴァに向かつて駆け抜け更に牙狼剣を振り抜いた際に発生した衝撃波を叩き込む

その衝撃波を瓦礫が多少はクッションや壁の役割を果たし威力を殺してはくれたがその凄まじい威力の前には大した意味もなくラルヴァは先程懐に受けた傷に更に追い討ちをかける様な攻撃を受けつつも周囲の瓦礫を両腕を振り回す事で吹き飛ばしながら起き上がると自身に向かつて一直線に駆けてくる牙狼に向かつて咆哮を上げる

そんな耳をつんざく様な凄まじい音量の咆哮を真正面から受けても牙狼はその速度を緩めずむしろ更に加速しラルヴァに接近すると飛び上がり連続で牙狼剣を振るい止どめに空中で体を回転させ右足の踵をラルヴァの頭上から叩き込む

《グウウウ…アアアアア！！》

ラルヴァは頭に受けた衝撃でふらふらとよろめけながらも片腕で頭を押さえ付け再び叫び声を上げるが牙狼は素早く体を捻ってから繰り出した拳でラルヴァを別の壁へと突き飛ばすと再び鎧の手首の部分で牙狼剣の刃を滑らせ構えるが今回はそれだけに終わらなかつた

『悪いが時間を掛けている暇はないんでな、キリユウ！』

牙狼が彼に付き従う精霊の名を叫び牙狼剣を天を突き刺す様に掲げると鎧と同じ金色の炎が鎧の上から中指に通された指輪に灯りその炎は右手の鎧を覆う程に燃え広がり牙狼はその右腕を前に突き出し牙狼剣をゆつくりとその手首の上を滑らせていくと刃全体に炎が燃え広がる

本来ならば牙狼は魔戒火という特殊な火をその身や剣に纏わせるが牙狼の背負う称号と共に変化した金色の炎は大精霊であるキリュウの加護を受けた聖なる力を宿した炎である精霊火セイレイカと呼ばれる炎である

牙狼であるトレイズは知らないが彼が使っているこの炎は自身とラルヴァにも密接な関係がありこの炎で無ければラルヴァを滅する事は出来ないのである

その知識を彼自身は失ってしまっている筈なのだが体が覚えているのかはたまた本当に時間を掛ける気がないだけで使ったのかは謎であるがその炎を見て炎を纏った牙狼剣を向けられたラルヴァの方は本能でそれが自身に取って最大限の危険であると感じ取ったのか背を向けてこの場からその炎から何より牙狼から逃げようとしたが時既に遅かった

『これで終わりだ!!』

その叫びと共に牙狼が交互に左右斜めに牙狼剣を振るうと剣に宿っ

ていた炎は巨大な刃の形を成しラルヴァに向けて飛来していく中で
合わさり×字型の炎となり逃亡しようとしたラルヴァを背中から焼
き斬り呻き声を上げるラルヴァはその炎に焼かれていき光となり消
滅した

それを確認した牙狼は剣を鞘に納めるそれと同時に鎧は消し飛ぶ様
にその姿を消しトレイズは一息吐くと四大の力でクルスニクの槍を
破壊したであろうミラの元へ戻るべく視線を自身が飛び上がった
た下層へむけた瞬間にそれは起こった

「なっ!?!…こ、これは!何が、起こっている…?」

『ぐうううううっ!』

突如何かの起動音の様なものがしたかと思うとトレイズは頭に凄ま
じい痛みを感じ傍らにいたキリュウもまるで何かに力や体を無理矢
理引き剥がされる様な苦しみにもがいていたのだった

時は逆上りトレイズがラルヴァと戦闘を開始した頃

「す、凄い…あの大きさの魔物を相手にたった1人で圧倒してる」

「当然だ、精霊の主であるマクスウェルを守る為に戦う盾であり剣でもある私だけの騎士なのだからな」

ラルヴァという名前もあれがどんな存在かも分からないジュードは突然変異した巨大な魔物だと推測しそれを圧倒しているトレイズを呆然としながら見上げミラは当然だと胸を張り自慢する様にジュードに言葉を投げ掛けると目の前に突き出した両腕を十字を切る様に振るう

それにより上下左右にそれぞれ風・地・火・水を現わす紋章が浮かび上がるとそれが円状況へと繋がり一つの巨大な円型の陣となりミラの周囲に居た四大精霊達はその姿を実体化させ現われた

「やるぞ！人と精霊に害為すこれを……精霊の主！ミラ！マクスウェルが破壊する……！」

『OK〜！』

『いくでしょ！』

『ゆくぞ！』

『分かりました』

目前に展開した精霊術の陣へと突き出した手に力を込める様に叫ぶとその叫びに答えた四大精霊達が飛び上がりクルスニクの槍を四方から囲む位置へとそれぞれ向かっていく中でその光景を見たジュードは柱の影から思わず飛び出してしまい飛んでいく四大精霊を見上げる

「ほ、本当に四大精霊を従えている…！？本当にミラは精霊マクスウェルなの…！？」

クルスニクの槍を四方から囲んだ四大精霊とそんな彼等を従え命令を下すミラを見たジュードはトレイズから聞いた説明でも半信半疑だったが本当にミラがマクスウェルなんだと改めて思っているとなんな彼等の背後から足音が聞こえてきた

「!…誰っ!」

「くっ、もう来てしまったのか!？」

背後から聞こえた足音にジュードは慌てて振り返りミラは術式を展開する為の陣に両手を突き出したまま視線だけを背後に向けるとそこに来た人物をミラは研究所に居る一般兵達だと予想していたがその予想とは異なり白と蒼のマントに加え蒼いフードで顔をすっぽりと覆っている明らかに研究所の一般兵とも研究者とも違う謎の人物が立っていた

「……………」

その人物は何をするでもなく何かを語るでもなく只、そこに立ち尽くしているだけだというのに何故なのかは自分でも分からないがミラはその人物から目を離せなかった

その間にその人物はというとゆっくりと歩み始めそれを見たジュードは行く手を遮るつもりではなかったが前に出ようとした瞬間に自身が置かれている驚くべき事態を知り驚愕する

(う、動けない！……足どころか身動きが出来ないし…声も出ない！？)

そういざ動こうとしたはいいもののジュードの足は床に縫い付けられた様に動かさず体もまるで石像になってしまったのか様に身動き一つどころ声すらも出なくなってしまうっておりそんなジュードの動揺を全く意に介さないとより最初から彼自体を存在すら見えていない様にフードの人物はジュードの横を通り過ぎ彼も只、その場で置かれた現状である石像の様に何も出来なかった

そうしてゆつくりとだが確実に歩みを自身に向かって進めてくるフードの人物を見てミラは冷や汗を流し始めるがそれは現状が全て自身に取って最悪な状態に向かって進んでいるからである

今、目の前には彼女が此所に来た目的であり自身の使命を果たす為に破壊しなければならぬ黒匣^{ジン}があり、それを破壊する為に彼女は展開している術式の陣から離れる訳にはいかず常に彼女を守ってくれる騎士であるトレイズは自身の使命を真つ当するため彼女の目的の妨げとなる存在と戦闘中であり助けは期待出来そうに無くフードとマントに隠され男女や年齢は分からないがその圧倒的な存在感からジュードでは押さえ切れそうもなく事実仕方のない事だが彼は動けずにいる

そんな危機的状況に陥ってしまったミラはこの状況をどうすれば打破出来るのか必死に考えを巡らせていたがその思考は突然強制的に終了させられた

トント
…

「な……?」

「やっと…始まる」

思考を巡らせている間に自身の目の前まで来ていたフードの人物が自身の額に人差し指でつつく様に触れたかと思うと声を発した…その声の高さからするに恐らく女性であるらしく、彼女は淡々と言葉を紡いでいく

「欲望に染まりし世界の中で変革をもたらす者達が集い始めた…や
つと、全ての歯車が揃った」

「な、何を言っている…?」

自身の額から指を離されたはいいが淡々と誰かへと語り掛けている

のか只の独り言の様な呟きなのは分からないがとにかく訳が分からない事を喋り続ける彼女を前にしてミラは冷や汗を流しながら疑問を投げ掛けるとそれに反応した彼女はミラを真っ直ぐに見据える

「私は、待っている…救世主を…ラタトスクを」

そうミラに呟いた彼女の顔はどんな表情が分からず声からも感情を感じ取る事は出来なかったが最後に呟いた聞いたことのない単語である『救世主』と何よりも聞き慣れた『ラタトスク』という単語には感情が籠っていたがその感情が何なのかよりもミラには気になる事があった

私は知っている…この声を…何より、その『瞳』を…!?

彼女の何らかの感情が込められた呟きが発せられた時にミラは、はつきりとは見えないがそのフードに隠された瞳が見えた気がしていた…その時に見えた瞳と先程から聞いている彼女の声に何処となく覚えがある様な気がしてミラが口を開こうとしたが突然、爆発音が周囲に響き渡りミラといつの間にか動ける様になったジュードは音が聞こえてきた方向に視線を移すとそこには戦闘に勝利したトレイズと焼き尽くされ消えていくラルヴァの姿があった

「トレイズ……！ラタトスクを待っているとはどういう意味……消えた？」

トレイズの勝利を見て安心したミラは先程の眩きの真意を問い質そうと彼女の方を振り替えるが既にそこには彼女の姿は無くクルスニクの槍を四方から囲んでいた四大達に視線を移すと彼等も先程まで彼女の得体のしれない威圧感により身動きが出来なかつたらしくクルスニクの槍は健在であり彼等の表情にも動揺の色が見て取れるが脅威が過ぎ去った事でミラは気持ちを切り替え改めて四大達にクルスニクの槍の破壊を命じたのだが突然の物音により視線をそちらへ移す

ガタッ…ドンッ！

「ヒコヒッ……」

「お前は…！」

「あの時、研究室にいた人…!？」

物音に反応し見つめた先ではクルスニクの槍本体の側面にある操作端末の一つらしき物へと寄り掛かるトレイズとミラが使役するイフリートが撃退した少女の姿があった

「許さない……うつざいんだよ…!」

バアンツ！ガタカタ…タタン！

シュウウウウ…ガコンツ…!!

少女が憎しみに染まった視線をミラとジュードに向けると直ぐに端末を操作し始め恐らく起動用のコマンドを入力させるとクルスニクの槍はその命令に従い己を起動させる

フイイイイイツ…!!

「なっ…マナが抜ける…?」

「馬鹿者…正気か…!？」

「アハ…アハハハ!」

起動したクルスニクの槍は周囲一帯から人間の靈力野や周囲に漂う微量な物から四大精霊を構築している物も含めとにかく全てのマナを凄まじい勢いで吸い出し始めクルスニクの槍の目の前に居るミラとジュードは一番の被害を受け同じ様に近くにいる起動させた少女も苦しい筈なのだがそんな事はお構いなしに狂った様に笑い叫び続ける

スタツ…ザンツ!

「キャハハハハ!要約あんたも来たかああ!!」

「っ…こいつを…止める!」

「トレイズ…！」

上層での戦いに勝利していたトレイズが装置を止めさせようと自身もクルスニクの槍の力で苦しめられながらも少女の前に飛び降りて来て剣を振るうが次の瞬間に少女は驚くべき行動にでる

「アハハハ！！クルシメ…お前もクルシンデし…死ねよーっ！
！！」

ガキイイインツ…ボンツ！

「…な！？」

何と少女は持っていた剣を端末へと破壊するために突き刺しその壊れた証拠である爆発を見届けると同時に気を失い倒れてしまう

「トレイズ…装置を…っ！」

「分かってる！……駄目だっ……完全に壊れちゃってる……くっ
！」

少女を端末から押し退け何とかクルスニクの槍を停止させられないか駄目元でトレイズは端末を操作するが結果は予想通りでありクルスニクの槍は暴走しており端末の操作を全く受け付けずトレイズは最後の望みをかける為にミラの元へと飛び降りる

「ミラ、こうなれば残された手は……一つしか、ない……」

「！……なるほどな、ジュードあと暫く耐えてくれ……予定しなかった事が確かに多々あったが……いささかも問題は、ない！！」

トレイズが語り掛けながら正面にある操作端末の台の上で浮遊ゲイトしている装置を見た事でミラはトレイズが言いたい事を理解し靈力野にクルスニクの槍が作用し続ける苦しみを歯を食いしばる事で噛み殺し操作端末へと冷や汗をかきながらゆっくりと足を進めトレイズもそんなミラを追う様に足を進める

「まさかこの状況で止める気……？ミラもトレイズも苦しいはずなのに、どうしてそこまでして……」

「私は全てを護る者、ミラ＝マクスウェル……私がやらねばならない……それが私の、使命なのだから……！」

「ミラ……」

ジュードの問い掛けにミラは苦しみつつも自身の信念を貫く為の行動であると答えを返し、何より果たさなければならぬ使命を果たす為はその歩みを止めない……そして、そんな中で苦しい筈なのに微笑みながら話す

「何よりも……誰よりも私を信じてくれている私の騎士の前で、私は……決して倒れる訳にはいかないのだ……！」

「っ……嬉しい事言ってくれるねえ……！」

「ミラ……トレイズ……」

ミラはこんな状況だと言うのに自信に溢れた表情でそう言うとそれを聞いたトレイズもくくつ、と笑いながら彼女を支える様に側で共に足を進めて行きそんな互いに信頼している姿を見たジュードが2人の名を呟いた瞬間にそれは起こった

ブンッ！

「ぐっ……これは……な!？」

「キリユウ!？」

ミラとトレイズが踏んだ床に非常用のクルスニクの槍の力に連動した罾が仕掛けられていた様でそれが発動し3人は動きを封じられたが直ぐにその拘束は消し飛びミラは何が起こったのか分からなかったがはつとしたトレイズは自身に付き従う精霊の名を叫び上空を見るとそこには四大達は先程の罾に拘束され彼に名を呼ばれた精霊は恐らく自身にトレイズ達に発動した罾を移し替えたらしく四重の拘束陣により苦しめられていた

「キリユウ!お前達!!!」

『このままではお前達の身が危険過ぎる』

『私達に僅かな力が残っている内に…早く、引くのだ…！』

「な……なんだと!？」

「そんな事が出来る訳無いだろう!！」

「その、通り……だ!！」

イフリートとキリュウが一刻も早く此所から立ち去る様に言っがミラとトレイズにそんな事が出来る筈も無く何とか操作端末まで辿り着いたミラは浮遊している装置を掴み何とか引き抜こうと力を込めトレイズはそんなミラに力を貸そうとするが四大達とキリュウの声が頭の中に響いてきた

プイーン…

『トレイズ!』

『貴方はミラを守るのでしょうか!?!』

『だったら此所は僕達に任せろっての!』

『キリユウの事も僕達に任せろでし!』

「ぐっ…それは…」

『な!?!お前達!?!』

感情が激しいイフリートや表に出やすいシルフだけではなく普段なら絶対に叫ぶなどしないであろうウンディーネまでもが感情を露わにしてトレイズに向かって叫びノームすらものんびりとしつつ何時もとは違う真剣さに満ちた声を聞きトレイズは何も言い返せずキリユウはノームの言葉に動揺し始める

『貴方まで此所で2人の側から消えてしまう事だけは避けなければならぬ!』

『貴方もそれは分かっている筈です』

『しかしっ!』

『僕達に残ってる力を一気に爆発させればその衝撃で貴方の意識と力の一部は逃れられる筈でし!』

『ミラの事、頼んだよ!』

『お前達!止めないか!私も力を使えば!』

「皆——!!!!」

トレイズとキリュウの言葉も空しく四大達は己に残された最後の力を振り絞り解き放つと凄まじい衝撃が波となりクルスニクの槍を中心にこの部屋全てを飲み込み

「ぐうっぐうっ！！」

カツ！ガコオン！！

その衝撃波によりミラは掴んでいた装置ごと操作端末から吹き飛ばされてしまいそれを見たトレイズは急いで自身も床を蹴り飛ぶと正面からミラの背中を受け止めるが装置が外れた事によりクルスニクの槍はその機能を強制的に停止状態へと追い込まれその影響に縛られていた四大精霊達と拘束陣に捕縛されていたキリュウの力の大部分を吸い込みその機能を完全に停止させた

ガラガラ…ガコツ！

バシッ！ドサッ！

ズズズツ…パシッ！

ミラを何とか抱き締める形で受け止める事は出来たがトレイズは先程の衝撃波で大破し中央から崩れていく橋の片方にその身を叩き付

けられジュードの方はというと衝撃波の影響は受けなかったのだが崩れた橋の上に居たために崩壊に巻き込まれ落下しそうになるが何とか橋の手すりに捕まり落下を免れた

「大丈夫か？ミラ」

「ああ、私は大丈夫だトレイズの方こそ怪我は無いか？」

トレイズは背中から壁に凄まじい力で叩き付けられた痛みで表情を若干曇らせるが片方の手で落下しないように崩れていく橋の残骸の手すりを掴みもう片方の腕の中で抱き締めるミラに無事を確かめるとミラは自身を庇ってくれたトレイズを心配しその手の中で例の装置を小型の円盤へと姿を変えさせ素早く胸元にしまつと向かい側で手すりに捕まっているジュードに視線を移すと同時に助けようと手を伸ばした

「ミラ！四大精霊が…！」

「ジュード！待ってる今助け…！？」

ポウ…シュンツ

装置を引き剥がす事に夢中であの時に何が起こったかミラは見えないがそれを見ていたジュードはそれを伝えようとすがそれよりも早くミラはシルフの力を借りようと精霊術を発動させようとしたのだが術が発動する事なく目の前で術式の陣は消滅してしまいミラは戸惑いトレイズは両手が塞がっている為に精霊術を発動出来ずに八方詰まりの状況を打開しようとしたが次の瞬間に橋は完全に崩壊してしまいトレイズ達3人は地下深くへと落下してしまう

「わああああっ!」

「くっ…!?!」

「ちいっ!」

落下していく中で元々どうしようもないジュードは落ちていくしかないがトレイズが手すりから手を放し瓦礫を足場に飛び彼を掴むが落下していく状況そのものは変わらずミラも四大精霊の力を借りる事で可能な彼女にとっては当たり前だが人間から見ればとてもなぐ強大な精霊術が使えなくなってしまった事に困惑するばかりだ

「……………これはもう…運命に任せるしかないな」

結局ジュードを掴んだ事により再び両手が塞がってしまい精霊術が使えないトレイズはミラを抱き締める手とジュードの服の裾を掴む手の力を強めるしか落下していく中で出来る事は無かった…

真実への始まりを告げる鐘は鳴り響く（後書き）

おまけ

チャット

時系列は高原にて時間を潰している時

《食事》

「んぐんぐ……少し、味が濃かったか？」

「前から聞こうと思っていたのだが……トレイズは何故食事をするのだ？」

「何故って……食事をする事に理由をそこまで考えた事はないな」

「ふむ、トレイズと共に20年生きているが……トレイズが可能な限り『食事』を取る必要性が未だに理解出来ない」

「私の様にシルフとウンディーネから栄養素を貰った方が時間は掛からないし効率的だろう?」

「それはそうかもしれないが…精霊とは言え人の体を持っている以上こういうのも大事だと思うんだがな」

「そうか?その割りにはあの『食事』に関しては何時も困っているじゃないか?」

「うっ!…!…あ、あれは確かに…!しかし、味覚を最大限に味わえるというのを利点だと…!…!思いたいな」

《精霊と男の子、女の子》

『たっく…!本当に放っておいたら何もしないんだからな、ミラは』

『本当ですね』

「シルフ、ウンディーネ…!そうは言っが、これに意味はあるのか?」

『意味が無いわけないだろ？ミラも女の子なんだから身だしなみくらい気にしないと』

『そうですねよ、こつこつ所はトレイズを見習って欲しいものです』

「ノーム、後ろの髪跳ねてないよな？」

『はいでし、今日もバッチリでしょ！』

「そつか、すまないな」

『髪を結わないどころか男であるトレイズだって髪の手はちゃんと気に掛けてるって言うのにな』

『全く、ミラはもう少し女の子としての自覚が欲しいものです』

『全くだ』

「……………よくわからないな」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0043x/>

TALES OF XILIA ~ マクスウェルの騎士 ~

2011年10月8日04時30分発行